

中国の 伝承医療に 学ぶもの

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
天然医薬品学分野

川添 和義 KAWAZOE Kazuyoshi



平成13年度文部科学省在外研究員として、2001年5月より10か月間、北京にある中国医学科学院薬用植物研究所および北京中医薬大学を訪問いたしました。現在、北京は1千万人を超える人口を抱える大都会となっていて、上海とともに中国の発展を象徴する街でもあります。

訪問の目的は中国で使用されている中薬材（中医学で用いられる薬材）に関する研究で、日本で用いられている漢方薬の材料とはまた違った薬材に巡り会うよい機会となりました。中医学は現在の中国社会でも力強く生きており、むしろ西洋医学より生活に溶け込んだ医療体系と言えます。また、医師、薬剤師も西洋医学と中医学ではライセンスが異なっていて教育課程も異なるので



すが、相對峙するものではありません。互いに有利な点は取り入れようという考えが一般的で、一つの病院で中医学と西洋医学の医師が患者の希望を取り入れながら協力して治療に当たるといったケースが多く見られました。このような考え方は日本ではまだほとんど浸透していないものと言えます。私の訪れた薬用植物研究所では中医学理論に基づいた医薬品開発をはじめ、原料植物に関する化学的研究など、また、中医薬大学では中薬を用いた新規薬剤の開発研究や、気功、按摩、鍼灸の中医学治療法に関する教育研究なども行われていました。このように自国の伝承医学を忠実に、また、積極的に現代社会に取り入れようという姿勢には大変学ぶものが多いように思えました。



今回は短期間の出張なので単身で訪れたのですが、普段の生活は同じ東アジアの国であるためか、あまり違和感のないものだったと思います。食事は当然中華料理なのですが日本で見えるような、きれいなお皿に並べられたものはあまり見られず、学校の食堂では金属のお皿のうえにご飯とおかずが一緒になったようなものを食べるようになりました。見た目はあまりよくないのですが、味は決して悪くなく、何といっても安い（食100円程度）のが魅力的でした。それと普通の大学の食堂であるにも関わらず食堂は3階建ての立派な建物で、メニューの種類が大変多いのにも驚きました。中国では「医食同源」と言われるように、日々の食事を大変重要視しています。昨今、日本でも薬膳など食に機能性を



追求する考えが芽生えてきていますが、中国ではすでにそのような考え方が広く確実に人々に定着していることを実感しました。そのように考えると、古く日本が中国に学んだ如く、現在に至ってもまだこの国から学ぶことは多いように思います。